

---

# リインカーネーション ~ 転生 ~

新風ゆりあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リンカーネーション ～ 転生～

### 【Nコード】

N8075Z

### 【作者名】

新風ゆりあ

### 【あらすじ】

黒づくめの男によって、毒薬を飲まされた新一は、死んでしまいが、3年後、江戸川コナンとして生まれ変わる。

アクト1

工藤新一、死す！？（前書き）

初めまして、新風ゆりあです。よろしくお願いします

アクト1

工藤新一、死す!?

高校生探偵の工藤新一は、幼馴染で同級生の毛利蘭とトロピカルランドに遊びに行き、トロピカルランド内にある観覧車のたもとで、黒づくめの男の怪しげな取引現場を目撃してしまった。取引を見るのに夢中になっていた新一は、背後から近づいてきた黒づくめの男の仲間に気づかず、その男に毒薬を飲まされてしまった。そして、それから一時間後、トロピカルランドの警備員によって、新一は遺体となって発見された。そして、新一死亡という悲しい知らせは、警察と、蘭と、蘭の父親で探偵の毛利小五郎と、新一の家の隣に住む発明家の阿笠博士に伝えられた。

アクト1

工藤新一、死す！？（後書き）

新「おい、なんだよ、これ！？俺いきなり死んでんだけど！？」

ゆ「ストーリー展開上、そうなってるの！」

新「こんなん、この話、続くのか？」

ゆ「大丈夫！」

新「ほんとかなぁ？」

残された人たちの思い（前書き）

2話目です。

## 残された人たちの思い

「嘘でしょ？新一。死んだなんて嘘よね？」新一の遺体に縋り付き、蘭は大声で泣いた。その様子はまわりの人達の涙を誘った。「蘭君、君のつらい気持ちはよくわかるが、工藤君は死んだんだ。」目暮警部がつらそうな顔をした。「まさかこの探偵坊主がおっちゃんじまうとはなあ。一寸先は闇ってこのことか？」小五郎が顔をしかめた。「まさか新一君がしんでしまうとはのう。わしゃ優作君たちに合わす顔ない。こんなことになるかわかつたら、3年前、優作君たちがあアメリカで住むことにしたとき、新一君も一緒に行つたらよかつたんじゃ。じゃが新一君は日本に残りたいとごねたし、わしもわして新一君の面倒ぐらい見るって言ってしもうたし。あのときあんな事言わなんだらよかつたんじゃ！そうすれば新一君は死なずに済んだんじゃ！」博士が自分を責めた。

残された人たちの思い（後書き）

感想などお願いします。



アクト3

鑑識の結果（前書き）

3話目です。高木刑事が出ます。

「目暮警部！鑑識の結果が出ました！」高木刑事が報告書を持ってやってきた。「うむ。それで？」目暮が高木に尋ねた。「鑑識の結果、死亡推定時刻は今から一時間ほど前。死因は特定できませんでしたが、後頭部に何か固い棒のようなもので殴られたと思われる傷がありました。」高木が報告書を読み上げた。「自然死かね？」目暮が高木に尋ねた。「後頭部に殴られたと思われる傷があるので、自然死ではないと思いますが。」高木が答えた。「では工藤君は何者かに殴られ、気を失ったところで毒物でも飲まされたのか？」目暮が考えこんだ。「ですが警部、遺体から毒物らしき成分は検出されませんでした。」高木が答えた。「毒物らしき成分が検出されなかった？本当かね？それは。」目暮が高木に尋ねた。「はい。」高木がうなずいた。「そうか。ご苦労だった。ところで阿笠さん、優作君たちには知らせたんでしょうな？」目暮が高木をねぎらった後、博士に尋ねた。「もちろんじゃ。明日の朝、成田に着くそうじゃ。」博士が答えた。「そうですか。」目暮がトレードマークの帽子を目深にかぶりなおした。そのとき、蘭が自分のバッグからソーイングセットを取出し、そのソーイングセットからさらにはさみを取り出し、そのはさみの切り先を自分の左手首に当てた。

## アクト3

### 鑑識の結果（後書き）

余談ですが、この3話目で、蘭が取り出したはさみは、「時計仕掛けの摩天楼」で爆弾の配線を切るのに使ったやつです。

アクト4

蘭の想い(前書き)

4話目です。

「らっ、蘭っ！？お前、何やってんだ？」小五郎があわてて、蘭の手から、はさみを取り上げた。と、同時に、博士が蘭を、背後から羽交い絞めにした。「やめるんじゃ、蘭君！そんなことをしても、新一君は喜ばん！むしろ悲しむだけじゃ！」「いやあ〜！放して、博士ー！新一のところに行かせてー！」蘭が泣き喚いた。「蘭、お前まさか、あの探偵坊主の事、好きだったのか？」小五郎が尋ねた。「うん。」蘭がうなずいた。「そうか。そうだったのか。で？お前は自分の気持ち、あの探偵坊主に打ち明けてたのか？」小五郎が渋い顔をした後、蘭に尋ねた。「打ち明けてなかった。だって、怖かった。好きって言って、もし新一から、幼馴染としてしか思ってた。好いて言われたらどうしようって思ったから。新一、割と女の子たちにもててたし、かつこよかったし、頭よかったし。サッカーバカで、ホームズおたくで、大馬鹿推理の助だったけど、私、そんな新一が好きだった。大好きだった！こんな、こんなことになるってわかってたら、もっと早くに打ち明けておけばよかった！」蘭が泣き崩れた。

アクト4 蘭の想い（後書き）

な、何とか更新できた。疲れた〜。

「蘭君、実はのお、新一君も君の事、好きじゃったんじゃ。」博士が蘭に話しかけた。「えっ!？」蘭が驚いた。「わしや、前に新一君に聞いたことあつたんじゃ。蘭君の事、どう思つておるんじやと。そしたら新一君、きつぱり答えたんじゃ。ただの幼馴染ではなく、一人の女性として見とると。」博士が切なさそうな顔をした。「博士、その話、本当なんですか!？」蘭が尋ねた。「本当じゃ。」博士が答えた。「そんな……。なんで、なんで言つてくれなかつたの?新一。」蘭が泣き崩れた。「わしも蘭君と同じこと聞いた。なんで言わんのじやと。そしたら新一君、蘭君と同じことを答えた。怖い、と。蘭君にただの幼馴染としてしか見てないといわれるかもしれない。そんなこと言われたら、きつと立ち直れない。そういつておつた。」博士がつらそうな顔をした。「新一がそんなことを? そんな……。新一!新一いー!!」蘭が泣き崩れた。「しんてから後悔したつて、もう遅い。二人ともちゃんと自分の正直な気持ちを言つておけばよかつたんだよ。」小五郎が顔をしかめた。

アクト5

博士の回想（後書き）

もうすぐお正月なのでしばらく更新できないかも・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8075z/>

---

リンカーネーション ~ 転生 ~

2011年12月29日07時47分発行